

『悪役令嬢はメンテレ国王陛下に今度はHな懲罰されるなんて聞いてません』

番外編シナリオ風

【二二二ジン】



禁断りんご 大虹蓮水

デイルアーバイン帝国、ゾディアーカ城にて。

平穏無事な日々を送っていた、あるときのこと。

レグルス国王は足早に回廊を歩きながら、妻である王妃に向かって声を荒げていた。

SE城の回廊にレグルスの足音が響き渡る

レグルス「（毅然と・高圧的に）…………ええい、下がれと言っている…」

レグルス「（怒った様子で）いくら愛しい妻であろうと、

それ以上は、口を慎まないか……！」

レグルス「（ツツコミ風）つ……」の私に、

……ニニンジンを！ 食べさせようなどとつ！

煮込みカレーならニニンジンも溶けるとがそういう問題ではない、なんかあのっ、甘くてエグみのある味がいやなのだ！」

レグルス「（溜息）私は……かつて食中毒によつて倒れたレオのことでの

食べ物を戻してしまった摂食障害を起こしていた。

だが、君の手作り料理なら……食べられるようになつたのだ。

それは君が、魔法では一瞬だからと、愛情込めて作ってくれるからなのだが」

レグルス「……ニニンジンだけは、どうしても！ きらいなのだ！」

レグルス「いやだ、絶対に食べないぞ。

……いやだ、いやだつ、いーやーなーのーだーー！」

レグルス「……な、なんだ、その……」

『大きな子どもかな？』、みたいな顔は……」

レグルス 「つ、私の体のためを思つて、しょげるとは……

我々は生身ではないのだから『体』といつても精神に過ぎないというのに

……か、可愛いすぎないか……？」

レグルス 「……、そこまで言つのなら……条件がある」

レグルス 「【食欲】、【睡眠欲】、そして【性欲】は、

生きる上で必要な三大欲求だ。

——そう、我々A.Iには、本来、必要のないもの……
ゆえにそれこそが、人間らしさと言える。

だから私は【欲望】という情動を大切にしたいのだが」

レグルス 「（意地悪に）何を言いたいか、わかるか……？」

そんなにも私にニンジンを食わせたいのなら……
君がその体で、より美味しく調理してくれないか」

レグルス 「いや。腕を振るつて、君のカラダを料理するのは……私か」

レグルス 「つまりだ……

君が下のお口でニンジンを咥え込み、淫らによがる姿を見たら……
私はきっと、そのいやらしいニンジンを、口に含みたくなるであろう。

くつくつくつ……」

レグルス 「……、あ。

私のニンジンが、早々に勃つてしまつたぞ？」

レグルス 「君はコレが大好物であつたな……。

こちらもあとで、君のお口いっぱいに……

頬張つてもらうとしような」

レグルス「……ん？」

いや、私がニンジンを咥え込むのではなくてだな」

レグルス「（慌ててうろたえる） ちょっと……待て、私につ……そんなモノ、入るわけなかろう！」

そつちはいくら愛しい妻であつても、駄目に決まつ……

や、やめろっ……やめないか！

王の命令を聞けぬというのか、駄目だというのに、

……駄目だ、それ以上はっ、やめ……っ！

アツー……！」

レグルス「……、ぱくっ」

レグルス「……むつ。これは……」

千切りにしたニンジンをオリーブオイルとワインビネガーでマリネしたフレンチ、

【キャロット・ラペ】、か……」

レグルス「ワインビネガーの風味ですつきりとした美味しさが引き立ち、

食欲をそそること請け合いではないか！

ははっ、さすが我が愛しい妻だ！」

レグルス「（嬉々として） ああ、これなら私でも食べられるぞ！

食べるから……」

レグルス「（急に口ごもる） あ、アメルプレイのほうは、

……いやだからな……」